

人千円しか日本に持ちかえられません、私はお金は無いし、子供のない人が私の子供達にお金をくださいました。十二年住んだハルビン市をあとに、出発直前に光昭がいなくなつて大騒ぎしました、あちこち探してやっと見つかり、ホッとしました、あのときもし見つからなかったら、中国孤児として、今頃親子の対面に来るのではなかったかと思ひます。

私達は、石炭を運ぶ貨物列車に乗せられ、午前十一時、ハルビンから南へ南へと走りました。途中ソ連軍に線路をこわされている所を三キロ近く歩きました、夜中です、私は自分のリュックの上に昭洋を乗せてお湯をもち、二人の子供の手を引いて一生懸命歩きました。ところが光昭がヘルニアがあるので熱をだして座ってしまいました。雨は降るし光昭だけ置いていくこともできない、母子四人で座ってしまいました、とに角、夜が明けるのを待つより仕方がなかった。しばらくして隊長さんが私達を探しにきてくださったのです、隊長さんは光昭をおんぶしてくださいました、ほんとうに助かりました。

九月半ばに新京を發つて、途中、糠来省というところに川があつてそれを歩いて渡り、川岸についたとたんに子供達の靴はなく、はだしでした。

九月二十日頃、奉天からコロ島の港で全員大きな船に乗り、十月八日博多港に着きました、なつかしい生まれ故郷熊本へ。

ハルビンで死んだ欣也と亡夫の供養になると思ひ、この体験記の一部分としました。

## 激動に生きて

神奈川県 北澤 治雄

昭和八年二月、国学院卒業を前にして満州国大同学院の入学試験に合格した。

長男の私が満州に渡ることは、母はひどく反対したが、父は、死ぬ奴は東京の真中にいても死ぬ時は死ぬ、と言つて許してくれた。弟を失つたばかりの父にしては、相当の英断だった、と人の親になつてみて思うこ

と切々である。

東京駅地下にあった「しよじ」での壮行式で、「山城国住国広」の銘入りの日本刀の贈呈を受けて、夜行列車に乗った。人々のうしろで頼りに眼を拭いていた母の白い顔が今でも忘れられない。一行六十人は玄海の荒波を越えて長春に到着、寛城子の現地中学校を利用する学舎で、中国、朝鮮、台湾、日本と入り混じった学生寮の生活が始まった。彼等は大方、日本の大学卒で日本語には不自由しなかった。食事は高粱を混ぜた一汁一菜。

午前は語学、中国事情、歴史。午後は軍事教練と乗馬が通常の日課であった。カーキ色の訓練服で衣食住はひどいものであったが、茫々たる大陸に、民族の差別のない、資本主義も社会主義も止揚した、理想郷を建設する。

前衛部隊だという自負に燃えた。正味七か月の大同学院生活であったが、生涯で最も深い友情に結ばれた日、満、鮮国の集団であり、貴様、オレの交際がつづいた。学院を卒業したもの皆、地方に出たがる、それ

も電気も水道もない、寒い汚い治安不良地方を望んで赴任していった。

私たちの使命は、ぬくぬくと暖房のきいた机の上で出来ることではない、辺境にあつて、部落に飛びこんで、民衆と膝をつき合わせて、南京虫に悩まされながらの村づくりこそ、すべての基礎であり、原点だと信じていたからである。

私たち同期のもの八人は揃って熱河省に入ったが、戦中戦後を通じて世を去り、今は広島の正田と私の二人きりになった。

私は満州国政府職員として承德の熱河省公署に勤務中召集にあい、昭和九年一月二十日、世田谷区三宿にあった野戦重砲兵第八連隊第四中隊に入営、二十三歳だった。在隊中、甲種幹部候補生となり部隊一番の成績で昭和十年一月十九日除隊、二月十一日に永原敏子と結婚し、翌々日に満州に帰任を兼ねての新婚旅行となった。

熱河省青竜県副参事官に就任し、宋子文を頭目とする大匪団に襲撃をうける等々のことも幾度となくあつ

たが、不思議に私は命を拾った。

昭和十二年、政府と協和会の人事交流で、私は協和会に出向となった、協和会熱河省本部の總務科長（部長）。という肩書だった。

協和会満州国の国民運動の組織である。この人事交流は、満州国が生まれた時からの十字架みたいなものであった。

軍部は、満州を領有して、対ソ戦の後方を確保する戦略的意図を持ちながら、永い間、軍閥による現地政権の不安定と無秩序に苦しむ満州原住民有志と組んで、王道楽土建設を意図したものである。

それは元来、水と油を無理にまぜるようなものであったと、今にして思わざるを得ないが、折からの大東亞戦争の推移に従い、物資と労力の収奪を強行せざるを得ない要請と、王道楽土志向とを調和させるために、協和会の強化充実を意図して人事の交流を実行したものである。

昭和十二年七月に特務機関長 細木大佐以下百数十人の日本人が殺される通州事件がおきた。

熱河省としても迅速な情報収集をする必要から、私は劉警察署長と汚い農民服を着て驢馬に跨って出かけた。明るいうちに密雲県城の門までたどりつき私はホッとしたような気分になった。

私たちは柳の木陰で、今晚の宿はどうするか、旅館は危険だが野宿はなお危ないなどと言っているところに、一人の中国人が現れた、彼は周という小学校教員で、かつて私のところに教育問題で熱心に相談に来て一緒に食事などもした男である。

彼は、私について来いというので、行くと一軒の穀物商に案内された。

南京虫の来襲にウトウトしていると、夜中、突然、彼が入ってきて、ここは危ない、直ぐ出ようと言う、飛び出すと、驢馬が三頭つないであって、自分に続いて走れというので、私共は夢中で彼のあとを追った。

小一時間、闇の中を走ったら、とある事務所のようなどころに着いた、机の上で寝ろ。と、明るくなったら直ぐ出発されたいと道を教えて帰ってしまった。それ以来、彼と会ったことはないが、彼は国民党员か、

共産黨員だったのでろう、何れにしても私たちは彼に助けられたのである。

午後四時頃、懷柔県城についた。ここには天津軍から反乱鎮圧のための部隊が来ていた。

私は隊長の騎兵大佐に会って情況の報告をしようとしたら、彼は、ここは天津軍の管轄である、君たちが関東軍の命令でこのへんをウロウロするのはけしからん。ほんとは逮捕するところだが、明朝早く帰れ、と言われた。

私たちは命がけて、敵中を突破して来たのである。それに対して一言のねぎらいもなく、罪人扱いにする。陸海の対立、陸軍内の功名争いをきいていたが、身を以ってそれを味わった。

国が亡びるときは仕方がないものだ、と今でも思い出すと不愉快である。

昭和十三年、協和会中央本部動員科、同十四年、人事科勤務、同十五年に政府に復帰して總務庁地方処事務官、同十六年、大同学院教官として第十三期生を担当しているところに赤紙で召集となり、関東軍野戦情

報部に勤務となった。

昭和十八年に、満州国政府から日本の総力戦研究所に入った。この研究所は三期で終った。私はこの卒業演習で総理大臣をやらされ、二週間ぐらいはほんものになったつもりで作業した結果は「昭和二十年までの継続は不可能、すみやかに好機をとらえて、講和を結ぶこと」であつたが、政府と陸大校長からの批評、講評は「神州の靈力を信じない、必勝の信念に欠く」者なり、との空しい言葉だつた。

昭和十九年二月、総力戦研究所を修了と同時に、満州国東滿總省参事官、総務科（部）長を命ぜられた、着任したが、輸送は既に不如意で荷物がつかない、興亜塾に間借りしていたが配給の味噌がもらえないので、仕方なく役所に頼んで一樽分けてもらった。

これを現地の林某というのが、どこかで耳にして、新任の科（部）長、職権で闇物資を入手している、新聞で叩くと言ってきた。彼は總省長の私的情報屋で、この土地のボスである、省の幹部は着任したら、何を

ている。私はこの話を聴いて意地になった。

この戦時下、こういう奴は一発やっておこうと決心し、省の応接間で会見し、彼は頭から血を流すことになった。

そのせいか、二月着任し、七月には防空部参事官。

国都、新京（今の長春）はB29の爆撃が連日、防空部の看板はかけたものの、人はなし、器材はなしで、やられっ放しみたいなものであった、そんな状況の中で、長男の東洋治（当時三歳）が赤痢入院、二男勝治が生れたばかりの妻は、まだ産褥にあった。私は泊まりこんで不眠不休で看病しているときに、政府の人事科（部）長の松田君が見舞いに来て「君にまた協和会に行つて、人事科（部）長をしてくれないか」と言う、二度目というので承知しなかった。「君はもしこの坊やが助かつたらいつてくれるか」と言う。半ば絶望していたときだから「こいつが助かつたらくそでも食う」と言った。

東洋治は治つて、結局、二度目の協和会出向となった。

戦局の逼迫に應じて国家全体の人材総動員を有効にすることであるが、有為の日本人はほとんど應召してゆくし、中国人はもう既に動かなくなっていた。

翌、二十年八月、広島、長崎の原爆攻撃について、ソ連の侵攻、満州は戦場となった。

私は職員家族の引揚列車の指揮者として、新京を出るときは、日本の戦闘機が私たちの無蓋車の上を翼を振つて飛んで守ってくれたりしたが、翌朝、奉天（今の瀋陽）に着いてホームに降りたとたん、無条件降伏を知らされた。烈日のホームの上では、子供を抱いて号泣する母親の姿があった。

ここに幻の帝国はあえなく消えた。青春を賭けた民族協和、王道楽土の理想社会の建設の夢は消えて、地獄絵巻が眼前に展開した。

戦闘を予定しての移動引き揚げであったが、終戦となつては着のみ着のまま出てきた家族は自宅のある新京に帰ることになった。

宿舎は既に現地民によつて荒らされているところが多かったが、私の宿舎はたいしたことはなかった。

間もなくソ連軍の進駐となり、強盗、暴虐等の巷と  
なつた。妻をおそうソ連軍兵士に抵抗する男はたちま  
ち自動小銃で沈黙させられる。

私は、武岡総務部長と共に奥地から引き揚げてくる  
職員家族への世話ごとに追われている。とある日、ソ  
連のゲーペーウの馬車がきて、霜のおりる十一月、貨  
車に詰め込まれてシベリア送りとなつた。七日間ぐら  
いたつた夕方、雪野が原に全員下車させられた。収容  
所は第五ラーゲルと呼ばれたところに、半年も経つた  
ろうか、一千人のうち二百人ぐらい死没した。こうし  
た星霜五年間、石炭掘りの死に生きの生活、正にこの  
世の地獄である、鬼気せまるものがある。寝台の友だ  
ちのパンを盗んで吊し上げられる者、元参謀肩章をさ  
げた人が炊事場の溝の中から黒くなつた小指ほどの馬  
鈴箸を拾っていたなどという哀話は山ほどある。

こんな食事では到底まともにも働けるものでない、ま  
して重労働中の重労働の炭砒作業である。

紆余曲折は省略する。

五年間の苦役の疲れを肩にして、習志野に住むわが

家族のもとに帰つた。七十五歳の父と、六十三歳の母、  
軍需工場通いで足をとばしてしまつた末弟、長女を頭  
に三人の子が（二女は病で千葉県一の宮療養所に、妻  
は進駐軍のメイドとして基地にいた）食うや食わずで  
待つていたのである。

さあ、これからこの家族を抱えて、舞鶴でもらつた、  
千円札一枚を握つて生きてゆかねばならなかつたので  
ある。ときに私は私は四十歳であつた。

## 海外居住の動機と私の家族

神奈川県 三橋 博

昭和十五年四月下旬、单身渡満し、満州土建公社に  
就職、半年後、妻と次男、三男を呼び寄せて、首都新  
京に生活の本拠をかまえ希望に満ちていた。

昭和十七年頃より公社の休日ごとに在郷軍人の教練  
が激しくなつた。職場にも赤紙召集がくるようになって  
た。